だうねす | カトリック山形教会報
4月号

発行日／2010年4月25日　発行責任者／主任司祭　本間研二

復活祭―3人が受洗

復活徹夜祭では初聖体の秘蹟

4月4日、復活祭においてヨセフ藤井脩さん、マリア藤井陽子さんご夫妻とラファエル武田和也さんが山形教会で洗礼の恵みにあずかった。また、前日の復活徹夜祭では小川直子さんが初聖体を授かった。今年は春の到来が遅いようだが、山形教会には一足早い春が復活祭とともにやって来たようだ。早速、洗礼を受けた藤井ご夫妻に喜びの気持ちをいただいたのでご紹介します。

写真左からラファエル武田和也さん、マリア藤井陽子さん、ヨセフ藤井脩さん、小川直子さん。

洗礼を受けて

この度は、復活祭のよき日に夫婦揃って洗礼の恵みにあずかりました。これから教会共同体の一員として、また兄弟姉妹としてよろしくお願いいたします。

受洗に際して、人生における「出会い」や、何かを決断する場合の「きっかけ」とは本当に不思議なものだとつくづく思います。

私は北海道の小樽生まれですが、大学時代は東京で過ごし、就職してからは会社の展開とともに宮城、福島、愛知、山形、茨城など転勤10回を経て無事定年退職を迎えました。

子供の頃から病気一つした事もなく、あらゆる健診も欠かさず受けていた私が、退職後8か月の時に、突然の大病に倒れました。急性の心臓血管の病気で、10人に1人助かるかどうかの状態だったと後で聞かされ大変なショックでした。それこそ「自分の人生の中で、突然底が抜けた」ような経験でした。

一方、妻は息子の嫁がカトリック教徒ということもあり、何か困ったこと、つらいことがあると、たびたび教会を訪れ、祈っていたようです。実家が仏教徒ということで、洗礼を受けることまでは考えていなかったようです。妻の母が病気で天に召された時でさえその決心はつかなかったとのことでした。しかし、祖母、父、母を看取り、これからは夫婦二人で支え合い生きていこうと考えていた矢先の私のアクシデントは、まさに、妻にとっても「人生の底が抜ける」経験だったのでしょう。突然倒れた私と共に救急車で山形から仙台の病院へ転送され、覚悟のサインをして5時間にも及ぶ大手術を見とどけ、私が意識不明のまま生死の境をさまよっていた1か月の間、着の身着のままでのビジネスホテルでの暮らしはどんなに心細かったことでしょう。

そんな時に、毎日、いのちの電話で妻を支えてくれたのが、この度代母を引き受けてくださったリディア林恵子さんだったのです。林さんは山形教会のシスター築沢と相談し、仙台オタワ修道院のシスター佐藤を紹介してくださったおかげで、妻はつらい看病の毎日を修道院の礼拝堂で祈り、乗り越えることが出来たのです。

私は今まで単なる「働きバチ」で、神に何かをお願いすることもないし、忙しい男で、かつ無神論者でした。しかし、今回のような経験により、今までとは全く異なった世界観が生まれ「新しい誕生」を通して、今までとは異なった生活を始めようという「きっかけ」が生まれました。

教会共同体の皆様方にあたたかいまなざしをもって迎えていただいた事が、私達にどんなに勇気を与えていただいた事か。そして祈ることで「人間を越えた運命（存在）」を感じたという妻の思いが、私に受洗の決意をさせました。

同じ教会に属すること自体が、何パーセントの奇跡で、かつ大変な偶然だと思いながら―

これが神のご意思、神の計画なのでしょうか。（ヨセフ藤井脩・マリア藤井陽子）

カトリック山形教会（洗礼者聖ヨハネ教会）
〒990-0039　山形市香澄町2丁目11-15　TEL.023-622-3574　FAX.622-3590
ホームページ　http://www.catholic-yamagata.com/

■ミサ　日曜日（午前9時30分）　水曜日（午後6時30分）

四旬節黙想会　3月27日（土）～28日（日）

『聖週間の神秘を現代に生かす』

松浦信行 神父
（日本カトリック神学院副院長）

日常の小さな出来事といえども、ちょっと考えただけで、深い意味に気づくことがある。神を感じたい、神に出会いたいと思う心の大切さを語る松浦神父。

聖週間を主キリストに心を合わせて過ごすためのポイントを「創造」「3つの誘惑」「連帯」などをキィーワードに、たくさんのエピソードをあげて話された。「人間は“その時”“その場”を創り出しながら、生きている意味を味わうことができる」「イエスの人生は3つの誘惑（パンのみにて生きるに非ず、唯一の神を信ぜよ、神を試みてはならない）を乗り越えてゆく一生だった」「人間は弱い存在だけれども神はそれをご存知なのだ」などなど。

高校時代弁論部で鍛えたという声はマイクなしでも聖堂の隅々まで響き、明るく朗らかな語り口であったが、内容は深く重かった。

創造…姫路教会での家庭訪問

旧約の天地創造の話もそうだが、エジプト脱出によってイスラエルという国ができたように、今日も人々は日々それぞれの“創造”を行っている。松浦神父本人が体験した話。ある家庭を訪問したら子どもたちが玄関に出迎えてくれて元気の良いあいさつ、いい家庭だなと思って誉めたとたん、奥さんから次のような話を聞かされた。「実はこうじゃない時があったのよ。千葉でのこと主人（主人が30代半ばの頃）が帰ってくると何か家の中が暗くなる。子どもたちは出迎えることもなく部屋に閉じこもっている。主人に何か起こっているのではないかと、よくよく考えたら一つのことに気が付いた。それは会社の上司が変わったということ。前の上司は自由にさせてくれた、今度の上司は細かくこだわる。それでストレスがたまって家で発散してるのかもしれないと思った。それで思い切って転勤を希望して姫路へ来たのよ、そしたら…」と。

誘惑…釣りの好きな神父の話

長崎の小教区を回った後五島に赴任したある神父、大好きな釣りが出来るという期待に胸をふくらませていた。漁師の信者に、船に乗せてもらって釣りを楽しみたいと頼んであったので、ある日曜日ミサが終わって、意気揚々と出かけた。お天気は上々…。ところが彼は「止めておきましょう。午後から嵐になる。」と言う。「楽しみにしていたのにそれはないでしょう。こんないい天気なのに…」と神父がせがんだので、彼は渋々船を出してくれた。案の定、雲行きが怪しくなって大風で船が揺れはじめた。神父は吐き気をもよおしてきた。そして二人は嵐の中を命からがら港に戻ってきた。神父は彼に詫びを言って教会に帰ってきて、はっと気付いた。私が海に放り出されて死ぬのは自業自得、漁師の信者は私のわがままに命を預けてくれたのだ。その時、神父の目から大粒の涙が止めどなく流れてきた。信者に支えられている自分であることに気がついた。そして、命を預けてくれた信者のため一生懸命生きようと決心した。“私たち神父は大きな力はないのだ。信者の一人ひとりから良いものを引き出しながら奉仕していくのだ。そうでないと軽はずみな神父で終わってしまうのだ。”と神学生たちに語ってくれた。松浦神父もその神学生の一人だったころの話。

連帯…人質になった高遠さん

NHKでイラクで拉致された高遠さんが出演した番組があった。自己責任という言葉が声高に叫ばれ、日本に帰ってきたらバッシングの嵐。彼女には人々が「生きて帰るな！」と言っているとしか聞こえなかった。死ぬことばかり考えた。そしたらイラクの友だちからメールがたくさん届いた。「私たちはあなたによってどれ程助けられたか分からない」と。体調と心が戻ってから、イラクの友人たちを訪問、すると高遠さんの中で何かがふっ切れた。その後、拉致されたことを一般の人に話せるようになった。イラクによって殺されようとしたが、イラクによって救われた。思ってもみなかったところに解決の糸口があった。